

## 質的ケース・スタディの正当性 ー「ケースの知」と「個別」、そして「普遍」ー

家 高 洋

### はじめに

医学系の領域において質的な研究の学問性（科学性）は徐々に認められつつあるが<sup>1</sup>，時としてそうでない場合もある。その典型例として松葉（2013，p.137）は，ある看護大学の一般教養系の教員の発言を紹介している。

「質的研究は客観的ではないし，サンプリングもいい加減で，方法論的におおいに欠陥がある。いくら立派な結果を出したって，偏見に満ちた偏った結果であるから，とうてい一般化はできない。一般化できないのでは科学的価値はゼロである」（谷津，北，2012，p.414）。

この発言は，修士論文発表会で質的な研究を行った大学院生に対してなされたものである。その院生がこの教員に反論できずに困っていた時，当時の学長は次のように述べたそうである。

「質的研究が依って立つパラダイムは，あなたが立脚するパラダイムとはまったく異なっている。質的研究のパラダイムは，学問的に新しく，しかし看護学にとってはけっして軽んじることのできない重要なパラダイムなのだ。あなたがもし，今後も優秀な看護学者を育てる気概をおもちなら，

---

<sup>1</sup> 例えば，Morse(2016[2012])，斎藤（2013）を参照。なお，EBM(Evidence Based Medicine)に対して，NBM（Narrative Based Medicine）が強調されるようになってきたが，EBMの発案者のグループがNBMを提起しており，両者は相補的である。尾藤（2013，pp.157-158）を参照。

すぐにでも質的研究のパラダイムを勉強するべきだ」(谷津, 北, 2012, p.414)。

学長のこの返答は、質的研究に無理解な教員への応答としては「ナイス」(松葉, 2013, p.137)であるだろうが、他方、質的研究と量的研究を別のパラダイムとみなす場合、クーンのパラダイム論によれば(Kuhn, 1996 [1970], pp.144-159/中山訳, 1971, pp.162-179), お互いに理解不可能になってしまう可能性がある(松葉, 2013, pp.137-140)。

では、質的研究と量的研究が別のパラダイムであるならば、質的研究の学問性はどこに存するのであろうか。松葉(2013, pp.149-150)は、質的研究と量的研究を峻別するのではなく、両研究の共通基盤と相互理解の可能性を明らかにすることによって、質的研究も「普遍」をめざすと主張する。また、谷津と北(2012)は、質的研究の結果の一般化の可能性を示すことによって、質的研究の正当性を確保しようとする。

松葉と谷津らの探究の方向性はかなり異なっているが、何らかの「普遍」あるいは「一般化」に質的研究の学問性を見出そうとしていることにおいては共通していると言えるだろう。だが、このような方向の探究は、質的研究を、何らかの量的研究等をモデルにして考察しようとしているとみなすこともできる(家高, 2016, pp.215-218)。

では、質的研究の学問性はどのようなものであり、その正当性はいかにして確保されるのかと問われるであろうが、質的研究はその目的や方法ならびに対象等について多種多様であるため、この問いに直接に答えることは困難である。したがって本稿は、質的研究について二点を限定して考察する。

第一に、質的研究のなかでも、一般化を行わず<sup>2</sup>、記述的なアプローチを採用する研究を取り上げる。具体的には、一つのケースを扱う研究(ケース・スタディ)である<sup>3</sup>。なお、それは、(後述するように)質的研究の

特徴を最もよく表しているといなされている。

第二に、テーマとして医療に関わる事象を取り上げる。既述のように、医療において量的研究と質的研究の双方が必要とされるが、質的研究の正当性が十分に認められていない場合があるので、質的研究に関する議論が現在も継続しているからである<sup>4</sup>。本稿では看護実践に関する二つの研究を検討する。

本論に入る前に、筆者の基本的な主張をまとめておこう。

(看護等の)医療の知において、筆者は、量的研究と質的研究という区別ではなくて、「一般化志向のアプローチ」と「ケース志向のアプローチ」を原理的に区別する。これら二つのアプローチは原理的に区別される以上、それらの優劣は問題にならず、両者の間には相補的な関係が存している(家高, 2013d)。

このような基本的な知識の枠組みを筆者はこれまでに明らかにしたが、本稿では「ケース志向のアプローチ」についてさらに検討してみたい。

本稿の構成は以下の通りである。まず、質的なケース・スタディの規定とその問題を概観する(第1節)。そして、ケースを「個別」とみなす村上(2016b)の主張を検討する(第2節)。続いて、グループインタビュー

---

<sup>2</sup> 質的研究における一般化を求める代表的なアプローチの一つは、グラウンデッド・セオリー・アプローチである (Glaser & Strauss, 1967/後藤ら訳, 1996)。また、現象学的な研究でも心理学者のジオルジのアプローチは本質看取によって一般性を得ようとしている (Giorgi, 2009/吉田訳, 2013)。

<sup>3</sup> 複数のケースを扱うケース・スタディや量的なケース・スタディ等、ケース・スタディ全般に関しては、Byrne & Ragin (2009) を参照。

<sup>4</sup> もちろん社会科学でもケース・スタディに関する議論は行われているが (George & Bennett, 2005, pp.3-35/泉川訳, 2013, pp.11-45), 「(治療等のための) 人体への介入」という医療行為において生物学や生理学, 化学等の自然科学的な知が中心であり, その結果, 医学系において質的研究の科学的な正当性が問題視されやすいと考えられる。

における個々の経験（ケース）の語り継ぎの過程を「側面的（lateral）普遍」とみなす西村（2016）の議論を考察する（第3節）。最後に「ケースの知」の学問性をまとめる。

## 1. ケース・スタディについて

### 1.1 ケース・スタディの規定と特徴

ケース・スタディ（事例研究）の「ケース」は様々である。たとえば、一人の個人の場合もあれば、家族や社会集団、さらに歴史的な出来事も「ケース」になりうる。個人の場合でも、そのライフヒストリーが扱われる場合もあれば、数時間の出来事が「ケース」とみなされることもある。つまり、「ケース」についての研究が「ケース・スタディ」であり、何らかの特定の研究方法を意味しているのではない。

このように「ケース・スタディ」の内実は非常に広範であるが、それでも「ケース・スタディ」と呼ばれる以上、何らかの共通性が存しているはずである。教育学者のステイク（1995）は、もっぱら質的なケース・スタディについて次のように述べている。

ケース・スタディに期待されているのは、ある一つの（single）ケースの複雑性を捉えることである。たった一枚の葉や、一本の爪楊枝でさえ、そこには独特の複雑性がある。しかし、葉や爪楊枝をケース・スタディのテーマにしようと思う人はほとんどいないであろう。あるケースを研究するのは、そのケース自体が非常に特別な関心を引き起こせる場合である。そして、そのケースの様々な文脈（contexts）とともに、その詳細な相互作用が探究される。ケース・スタディとは、ある一つのケースの特殊性と複雑性の研究であり、重要な周囲の事情の中でこのケースの活動を理解しようとするところから生じるのである

(Stake, 1995, p.xi)。

ステイクによれば「ある一つのケースの特殊性と複雑性の研究」が「ケース・スタディ」であるが、これは、質的研究の基本的な目標と共通しているだろう。

社会学者のフリックは、質的研究の基本文献の一つのなかで、質的研究を「(実験室のような特別に作られた研究状況ではなく)『そこにある(over there)』世界にアプローチし、『内側から』社会現象を理解し、記述し、時には説明する」と規定する (Flick, 2007, p.ix / 鈴木訳, 2016, p.ii)。そして、質的研究の実施の仕方について次のように記している。

質的研究は、研究課題の理解にあたって文脈と様々なケースを重視する。多くの質的研究は、様々なケース・スタディや一連のケース・スタディに基いており、しばしばケース（その歴史と複雑性）は、研究対象を理解するための重要な文脈なのである (Flick, 2007, p.x / 鈴木訳, 2016, p.iv)<sup>5</sup>。

フリックも、ステイクと同様に、ケースの複雑性だけでなく、特定の文脈のなかでのケースの理解を強調している。ここに量的研究の一般化と対照的な質的研究の特徴が示されている。量的研究での一般化は、多くの場合、脱文脈化すること (decontextualize) が前提となっているからである。

ところで、このようなケースの複雑性や特殊性、その文脈等を記述する際にモデルとされるのは、文化人類学者ギアツの「濃密な記述 (thick

---

<sup>5</sup> 本稿において引用文献の訳出に関しては必ずしも邦訳に従っていない場合がある。邦訳者の方々の訳業に対して深く感謝するとともに、ご寛恕をお願いしたい。

description)」である (Geertz, 2000 [1973], pp.3-30 / 吉田ら訳, 1987, pp.3-56)<sup>6</sup>。

また、マーケティング学者の石井 (2009) は、ケースの成立における多種多様な関係や意味だけでなく、偶然な事柄や「他の仕方でもありうる」可能性も記述することで「当事者の視点に立って、その当時の状況を読み解いていく」(p.182) というスタイルを提起している。

石井によれば、このような記述によって読者は当事者の体験を追体験できるだけでなく、読者自身が抱える問題に照らし合わせて「深い腹に落ちた理解」を得ることができる (石井, 2009, p.205)。そして、当事者の体験や経験に「棲み着く」ようなケース記述の方法は、「社会科学において、他に代わりうるものがない、一つの独立した、価値のある方法と見なせると思う」と石井 (2009, p.209) は主張する<sup>7</sup>。

医療の領域でも、患者の経験や医療者の実践等についての詳細なケース記述やナラティブ (語り) に基づいた研究が行われている (Chan et al., 2010)。また、卓越した看護実践に関するベナーらの研究は一定の評価を得ている (Benner, Tanner & Chesla, 2009 / 早野 Zito 訳, 2015 ; Benner, Kyriakidis & Stannard, 2011 / 井上監訳, 2012)<sup>8</sup>。

---

<sup>6</sup> 質的研究の進め方についてホロウェイらは、「濃密な記述」以外に「データが最重要であること (the primacy of data)」、「文脈化」、「場に浸ること (immersion in the setting)」、「『内側からの』 パースペクティブ (the 'emic' perspective)」(Holloway & Wheeler, 2002, pp.10-14 / 野口監訳, 2006, pp.9-13 ; Holloway & Wheeler, 2010, pp.3-8), さらに「反省性 (reflexivity)」(Holloway & Wheeler, 2010, pp.8-9) を挙げている。

<sup>7</sup> 石井の主張については、家高 (2013e) を参照。

<sup>8</sup> 質的看護研究のケース・スタディの例については、家高 (2013f) を参照。

## 1.2 ケース・スタディの問題点

ところで、以上のようなケース・スタディについて、その科学性が疑問視されることがある<sup>9</sup>。この疑問は、一つだけのケースの研究の場合により明確になる。

ケース・スタディに関する最も中心的な疑問は、研究結果の汎用性である。

ケース・スタディが取り上げるケースは多くの場合に独特であり、その特質が他と代えられないからこそ、ケースについて詳細で濃密な記述が不可欠であるとみなされる。だがこのことは、このケースから明らかにされる研究結果がそのケースにしか当てはまらないということでもある。さらに、一つだけのケースしか扱っていない研究は、その結果が他のケースに適応可能かどうか検証されていない。つまり、一つだけのケース・スタディは、研究結果の一般化に関して根本的な問題があるとみなされるのである。

第二の疑問は、そのケースが選ばれた十分な理由が示されていないことである。多くの場合、研究者が出遭ったケースの中から研究されるケースが選ばれているが、そのケースが当該の類似事象のなかで「代表的かどうか」等が十分に示されていないことが問題視される。

第三の疑問は、ケース記述を行う方法が確立されていないことである。研究者の関心によって記述される事柄が選択されるとすれば、その際に研究者の先入見が混入する可能性がある。それゆえ、その研究結果にはバイアスが存しているとみなされうる。

第四の疑問は、特にインタビューのみを方法とする研究に関わる問題であるが、研究参加者が語った事柄が客観的な事実であるかどうかかわからないということである。とりわけ一人だけのインタビューの場合、その語

---

<sup>9</sup> このような疑問は、本稿の冒頭で紹介した「ある看護大学の一般教養系の教員の発言」（谷津，北，2012，p.414）に現れている。

りの事実性の確証はしばしば困難であるだろう。

以上の疑問は次のようにまとめることができる。質的なケース・スタディは、その研究結果を一般化できないし、その再現も不可能であるだけでなく、(バイアスの除去やサンプリング等の)方法上にも本質的な不備があり、また、(インタビュー等の)データの客観的实在性を示すこともできない<sup>10</sup>。

このような疑問は、(古典的な物理学をモデルとした)自然科学的な見方から生じると言ってよいだろう。一般化可能性と再現性、ならびに一般的に当てはまる方法の確立と客観的な妥当性がこの見方のモデルとなっている。そしてこのような性格に基いて「現実」についての「予測」と「制御」が可能になっているのであり、ここにこそ科学性が存していると考えられているのである。

だが、研究成果の一般化可能性等が学問性に不可欠であるのだろうかという考えもありうるだろう。質的研究は、徹底して「個別」に関わり、それを明らかにするという立場もある。

## 2. 「個別」としてのケース

### 2.1 「個別者の学」というパラダイム

看護実践に関するインタビューに基いた研究を行っている村上(2013; 2016a)は、自らの営みを「個別者の学」と呼ぶ(村上, 2016b)。まず村上の主張を概観しよう。

---

<sup>10</sup> 質的研究におけるバイアスの問題については、家高(2013c)、研究にとつての「事実」や「現実」については、家高(2014a; 2014b)、質的ケース・スタディの「一般化」の問題については、家高(2016)を参照。なお、ケースが代表的であるかどうかは、その研究がそのケースを類似事象の「代表」として扱う時にのみ問題となると考えられる。



インタビューに基いた質的研究において、インタビューで語られた内容を明らかにして分析することが多いが、村上はインタビューの内容だけでなく、その「語り方」に着目して分析を行う。その方法論としてモチーフ、シグナルとノイズが挙げられているが、たとえばモチーフとシグナルについて次のように説明されている。

モチーフは語りのなかで目立ってくる単語（とくに名詞、動詞、形容詞、副詞）であり、実践の結節点となる。

シグナルは、日本語ではしばしばひらがなで表記される（「やっぱり」「もう」といった）助詞や接続詞のような文法用語、「（「どンドン」「だんだん」「ひゅーっ」といった）擬態語、セリフが地の文に混入する直接法や時制といった文法上の特徴である。諸々のモチーフの連結・組織化の仕方を示すのがシグナルである。文法の特徴が動きの組み立てを示すがゆえに、モチーフとシグナルの連結に実践のしくみが反映される（村上，2016b, p.316）。

このような方法論に基いて、村上（2013；2016a）はインタビューの語りに密着しつつ、緻密な分析を行っている。

また、村上によれば、インタビューはその都度一回だけの出来事である。たとえば医療関係者に対して語る場合と、（村上のような）医療の専門家でない人に対して語る場合では、その語り方が異なってくる（村上，2016b, p.322）<sup>11</sup>。

さらに、それぞれの看護師の実践の内容だけでなく、その語り方、そし

---

<sup>11</sup> インタビュー自身が構成的であることについては、Holstein & Gubrium（1995／山田ら訳，2004）を参照。

てそれを分析する研究者にもそれぞれ「唯一性」がある。それゆえに、インタビュー分析に基づく村上の研究は「個別者の学」とみなされるのである（村上, 2016b, p.322）。

ところで、研究における「個別」の重要性については、村上だけではなく<sup>12</sup>、既にドイツの哲学者ヴィンデルバントが主張している。1894年のストラスブール大学総長就任講演「歴史と自然科学」においてヴィンデルバントは、学問を法則定立的な（nomothetic）アプローチと個性記述的な（idiographic）アプローチに区別し（Windelband, 2011 [1907]／篠田訳, 1936）、後者が経験科学における質的研究の学理的正当性の一つの典拠となっている<sup>13</sup>。ヴィンデルバントは次のように語っている。

経験科学は現実の認識において、自然法則の形式における一般（das Allgemeine：普遍）を求めるか、あるいは歴史的に規定された形態（Gestalt）における個別者（das Einzelne：特殊）を求めるかのいずれかである。経験科学においては、現実の出来事に関する常住不変の形式を考察する場合もあれば、他方、現実の出来事に関する一回的で、それ自身において規定された内容を考察する場合もある。前者は法則

---

<sup>12</sup> 村上は次のように述べている（2016b, p.323）。「実は、歴史学や精神医学の事例研究や人類学のように昔から個別者の学は存在していたのだが、さまざまな分野の学問領域のなかに散らばっていたため、それとまとめられて名指されたことがなかった。個性が社会科学との間で緊張感をもつに至ったいまになって、初めて際立ってきた。現象学は『一般概念』ではなく『個別』という場における学問を要求しているのだ」。

<sup>13</sup> たとえば、質的研究の方法論の基礎的文献としてはLincoln & Guba（1985, pp.116-117）、看護研究ではSandelowski（1996, pp.527-528／谷津ら訳, 2013, pp.69-70）やHolloway & Wheeler（2002, p.7／野口監訳, 2006, p.6；2010, p.25）、質的研究全般に関してはSchwandt（2007, pp.145-146; 314-315／伊藤ら監訳, 2009, pp.81-82; 229-230）において、ヴィンデルバントのこの区別が言及されている。

の学であり、後者は出来事（Ereignis）の学である。前者は常に存在しているものを教え、後者はかつて一回だけ存在したものを教える。新たな術語を作ることが許されるならば、学的な思考は、前者の場合は法則定立的（nomothetisch）、後者の場合は個性記述的（idiographisch）である（Windelband, 2011 [1907], p.364 / 篠田訳, 1936, p.19）。

ヴィンデルバントの「個性記述的」という規定は、もちろん村上（2016b）のように具体的な方法を示しているのではないが、「一回性」や「個性性」を重視する点において、村上の立場を包括していると考えられるであろう。

## 2.2 「個別者」としての「ケース」についての検討

村上が指摘する通り、インタビューは各々唯一の存在であり、また、インタビューの語り方を分析する村上の研究結果も唯一の存在であるだろう。それならば、村上の研究や、「濃密な記述」に基づくケース・スタディを「個別者」とみなすことは妥当ではないだろうか。

ところで、伝統的に「個別」や「個」、「個物」という概念は、「普遍」や「一般」等の概念との対比において理解され、使用されてきた。他方、村上の研究や質的なケース・スタディは、このような意味における「個別」とは異なっていて、「普遍」あるいは「一般」との対比は存していないように考えられる。そして、村上が扱っている事象は、「個別者」とは別の仕方で規定されるようにも考えられる。このことを以下、検討する。

現象学の創始者フッサールは、主著『イデーン』第1巻において、類的な普遍化（Generalisierung）や個物（Individuum：個別者）を論じている。フッサールによれば、「個物」とは「ここにあるこのもの（Dies-da）」であり、それは、事象内容を含んでいる「具体物（Konkretum）」である

(Husserl, 1976 [1913], p.35／渡辺訳, 1979, p.94)。

このような規定は、フッサール自身が示唆しているように (Husserl, 1976 [1913], p.34／渡辺訳, 1979, p.92), アリストテレスの『形而上学』に基いている。

アリストテレスは、「実体」に関する議論<sup>14</sup>において「個物」を論じている。「個物」の規定は、「離れて存するものであること〔独立性〕と、『これ』と指し示しうるものであること〔個体性〕」である (Aristotle, 1933, pp.318-319／出訳, 1959, p.232)。

たとえば、「目の前にいて、『これ』と指し示すことができる『人』」が「個物」の典型である。他方、その人は、「人」として存在している以上、「人」についての「(類概念等の) 普遍」あるいは「一般」にも与している。それゆえに、「人」という一般概念や類概念や本質に基いて、「目の前にいる人」という「個物」を把握することができるのである。

以上のように、伝統的には基本的に「個物 (個別者)」とは「(目の前にある) 対象的存在」がモデルであるが、他方、その類的な普遍化が可能であり、類的な普遍に包摂されうるような存在である (それゆえに「個物 (あるいは個別者)」と「普遍 (あるいは一般)」とが一揃いで説明されているのである)。

それに対し、(看護実践等の) 個々の具体的な実践は、ガダマーが指摘するように、(一般的な規則等の) 「普遍」を単純に適用できるような事態ではない (Gadamer, 2010 [1993], p.31／三浦訳, 2006, p.26)。つまり、個々の具体的な実践をそのまま包摂するような「普遍 (あるいは一般)」

---

<sup>14</sup> もちろん、現在でもアリストテレスの「実体」に関する解釈は確定していない (中畑, 2008, pp.601-613)。本稿での検討は、基本的にロイドの考察に依拠している (Lloyd, 1968, pp.130-132／川田殖訳, 1973, pp.112-114)。

のようなものは通常は存在しないのである。

さらに、この実践についての語りや、研究者におけるこの語りの経験、ならびに語りについての分析も、「ここにあるこのもの」あるいは『これ』と指し示すことができるもの」であるような「対象的存在」ではない。したがって、語りやその経験、そして、それらの分析は、「普遍（あるいは一般）」と対比されうるような「個物（あるいは個別者）」とはみなされないのである。

以上のように考えるならば、村上が扱っている事象は、「個別者」というよりもむしろ、（ヴィンデルバントの文中の語を使うならば）「出来事（Ereignis）」とみなす方が適切であろう。看護師の実践だけでなく、その実践に関する看護師の語りも「出来事」であるし、語りがなされているインタビューの場自体も「出来事」であり、また、その語りについての分析も「出来事」であって、それぞれ一回限りの事柄である。

なお、村上は一般概念との対比において個別者の学を論じているが<sup>15</sup>、ヴィンデルバントにとって法則定立的なアプローチと個性記述的なアプローチの区別は「相対的」である（2011 [1907], pp.364-365／篠田訳, 1936, pp.19-20）。というのは、同じ一つの対象に対して両方のアプローチを行うことができるからである（その例として言語学等が挙げられている）。つまり、法則定立的なアプローチと個性記述的なアプローチは相補的であり、これら二つのアプローチを介して様々な理解が深まるのである。

続いて次節では「ケース」を「側面的普遍」とみなす西村（2016）を紹介し、検討しよう。

---

<sup>15</sup> たとえば「そもそも私たちが共感できるのは一般概念ではなく、個別の出来事や経験だけである。それゆえに人間の可能性を拡張する1つひとつの個別は1つひとつの可能性でもあるのだ」と村上は述べている（2016b, p.323）。

### 3. ケースと「普遍」

#### 3.1 グループインタビューによる看護実践の解明

西村（2016）の基本的な目的は看護実践の仕方の解明であり、その方法としてグループインタビューが使われている。その理由はおよそ次の通りである（西村，2016，pp.ii-v）。

通常，看護師の関心はケアする人（患者やその家族等）に向けられている。そのため，自分自身が何をどのように行っているのかについて十分に意識することは少ない。だから，自分の実践の経験について問われると，「そのようなことは考えたことがなかった」とか「それを言葉にするのは難しい」と応えることが多い。

他方，看護師の仕事は，（勤務交代におけるように）協働が基本である。仕事の引継ぎ等のカンファレンスで患者の状態だけでなく，看護師自身が感じたことや試みたことも語られる。このような「会話」の延長にグループインタビューという「会話」を位置づけ，これを試みることで，看護師たちが自分たちの言葉で自らの実践を語り出すことが実現するかもしれない。さらに，他の参加者の実践の言葉に触れることは，これまで自らが自覚していなかったり注意を向けていなかったりした経験に自覚的になるかもしれない。このような想定のもとで，西村はグループインタビューを企画，実施した<sup>16</sup>。

西村（2016）には六名の看護師の興味深く多様な語りだけでなく，西村独自の分析も含まれているが，本稿では，経験（ケース）を「側面的普遍」と論じる箇所に限定して考察する。

#### 3.2 グループインタビューにおける「側面的普遍」

西村はグループインタビューの最初の語りと，その後に続いた語りを次のように記している（2016，p.14）。

参加者の一人が、グループインタビューへの参加動機だけでなく、自分が経験した事例とそこで浮かび上がった問いを語った。この参加者は、末期状態の患者の苦しみに対して何もすることがなくて、体の向きを換えたり吸引するくらいしかできなかったのであるが、後で家族に感謝されたことについて、「自分のあり方」や「看護って何をすることなのか」と自らに問いかけたのであった。そして、この問いに触発されるように他の参加者たちも、自分が経験した事例にその問いを織り込みつつそれぞれが経験した事例を語り継いでいき、看護実践の意味が更新されていった。この事態を西村は次のように考察する。

ここでの経験の語り継ぎ、実践の意味の更新は、複数の看護師たちの語り合いのうちで達成され、それ自体が他者の経験の理解を示すものでもあった。そうであればこの語り継ぎは、「他者と私とのあいだに共通の地盤が構成」される「対話の経験」でもあると言えるだろう<sup>17</sup>。メルロ＝ポンティによって述べられたこの「構成」は、グループインタビューにおいて、語り手自身にもはっきり自覚されないままに経験

---

<sup>16</sup> 参加者は、約500床の総合病院に配布された募集チラシに応じた六名の看護師であり、いずれも女性だった。参加者の条件は、「臨床経験年数が十年前後あり、病棟で直接患者の援助に携わっている者」であった。彼らの中には、一時的に別の病院に異動をしたり、研修等のために病院を離れたりしていた者もいたが、インタビュー実施中は、すべての参加者がこの病院に所属していた。長い期間、この病院で働いているため、一名以外の参加者は、他の参加者とある期間、同じ病棟で一緒に働いた経験をもっていた。それゆえに、同じ患者について複数の参加者が（時として異なった観点から）語るということが生じており、このこともこのグループインタビューの特徴となっている。なお、調査は約一年半にわたって四回実施された。一回のグループインタビューは約二時間である（西村，2016，pp.ix-x）。

<sup>17</sup> Merleau-Ponty, 1945, p.407／竹内ら訳，1974，p.219

の語り方に内包される。つまり「共通の地盤」は、その語りの外側に作られるものではなく、先に語られた経験（事例）に重ねるように自らの経験を語る、そこに埋め込まれている患者やその家族の苦しみ状態への応答、その志向的経験の語り継ぎとして構成されているのである（西村，2016，pp.14-15）。

看護師たちの語り合いは、誰かが言い始めた「問い」に直接に答えるのではない。というのは自ら自身の経験を語るからである。しかしその中で、最初の「問い」が引き受けられ、別の事柄も含みつつ語られるときに、「共通の地盤」が作り上げられる。したがって、このように作り上げられたそれぞれの語りや経験は、「純粋な個別ではない」と西村はみなす（2016，p.212）<sup>18</sup>。

ところで、経験をお互いに語り継ぎあうグループインタビューは、メルロ＝ポンティの「側面的（latéral）普遍」に近いのではないかと西村は指摘する。

このあり方は、人類学を論じたメルロ＝ポンティの論考を彷彿とさせる。彼は、「厳密に客観的方法によって得られる大上段にのしかかる普遍ではもはやなく、われわれが民族学的経験によって、つまりたえず他人によって自己を吟味し自己によって他人を吟味することによって手に入れる側面的普遍」という「普遍的なものへ向かう第二の途」<sup>19</sup>

---

<sup>18</sup> 「また、個別の経験についても、純粋かつ私秘的・主観的な経験が、語りによって外部へ表出されたのではなく、『みな』の言葉に触発されて吟味され、理解を更新したり意味が発見されたりしていた」（西村，2016，p.212）。

<sup>19</sup> Merleau-Ponty, 1960, p.150／竹内監訳，1969，p.193



があると言うのだ。

ここでの「側面的普遍」は、人類学者（あるいは民族学者）が、未開の地へ赴き、そこでフィールドワークをすることを想定して論じられた事柄であるが、本書で取り組んできたグループインタビューという方法によっても、類似のことが、私も含めた参加者である看護師たちの語りの中で起こっていたと言えるだろう（西村、2016, p.208）。

各々の経験を「個別」ではなくて、「側面的普遍」として捉える西村（2016）の考え方は、一見、村上（2016b）の考え方と対立すると思われるかもしれない。だが、そうではなく、両者は一つの事柄を異なった観点から捉えようとしているのである。

たとえば、インタビューの語りは、村上（2016b）によれば、一回限りの出来事であり、その意味でそれぞれ独自であって、それゆえに「個別」と名付けられる。

他方、インタビューの語りは、インタビュアーの問いや受け答え等によって引き起こされているとも考えられる。この観点から考えれば、（一回限りとみなされうる）インタビューの語りも、インタビュアーとの相互構成によって形成されているので、「個別」とは言い切れないことになる。さらに、インタビュアーがインタビューの間に自分自身について再考し、それをインタビューされている人に語ってお互いに自分自身を考え直すならば、（西村が指摘する）「側面的普遍」が成立していると言えるだろう。

まとめると、村上（2016b）が着目しているのは、その都度に成立した出来事（語りや経験等）自体である。この出来事は、他の出来事とまったく同じではないのであり、それゆえに「個別者」なのである。

それに対して西村（2016）が着目しているのは、第一に、（グループインタビューでの語り等の）出来事を成立させている事態であり<sup>20</sup>、第二に、

成立した出来事が生じさせる事態である<sup>21</sup>。つまり、西村は、(語り等の)出来事の成立と結果の双方に着目しており、そのどちらにも「他者」が関与している。それゆえに、西村は、(語り等の)出来事は純粹な個別ではないと言う。そうであったとしても、グループインタビューでの語り「側面的普遍」であるとはどういうことなのか。続いてメルロ＝ポンティの思想を検討しよう。

### 3.3 メルロ＝ポンティにおける「側面的普遍」

#### 3.3.1 民族学との関連

メルロ＝ポンティが「側面的普遍」について述べているのは、論文「モースからレヴィ＝ストロースへ」(1959年)<sup>22</sup>においてである。この論文は、レヴィ＝ストロースが1958年にコレージュ・ド・フランスの教授に立候補する際、(すでにコレージュ・ド・フランスの教授であった)メルロ＝ポンティがレヴィ＝ストロースを推薦した報告に基いている(渡辺, 2011, pp.71-73)。

(既述のように)この論文のなかでは、二種類の「普遍」が主張されていた。つまり、「側面的普遍」と「大上段にのしかかる普遍(l'universel de surplomb)」である(Merleau-Ponty, 1960, p.150／竹内監訳, 1969, p.193)。「大上段にのしかかる」という形容はわかりにくい表現であるが<sup>23</sup>、おそらく同論文の別の表現では、この「普遍」は「メタ構造」(Merleau-Ponty, 1960, p.149／竹内監訳, 1969, p.191)と同じであろう。

---

<sup>20</sup> たとえば、これは、自らよりも先に他者が語った「問い」等である。

<sup>21</sup> これは、ある語り等の出来事が、その後の語りにも与える影響や結果、効果である。

<sup>22</sup> Merleau-Ponty, 1960, pp.143-157／竹内監訳, 1969, pp.183-204

<sup>23</sup> surplombとは、通常「上部が張り出した状態」であり、balcon en surplombは「張り出したバルコニー」を意味する。

たとえば、ある社会にはその親族関係や婚姻関係が存しており、その構造を明らかにするのが社会人類学の目的の一つであるが、それぞれの社会によって親族関係や婚姻関係は異なっている。レヴィ＝ストロースがその博士論文『親族の基本構造』（1947年）で行おうとしたのは、世界の多様な親族関係や婚姻関係の構造を、規則的な変換操作によって相互に導出できるように「構造の普遍的なコードのプログラム」を作り出すことであった。この「プログラム」は、結局、それぞれの社会の様々な構造が従っている「メタ構造」であり、それは、レヴィ＝ストロースによれば数学的な操作によって客観的に明らかになるのである（Merleau-Ponty, 1960, pp.148-149／竹内監訳, 1969, pp.190-192）<sup>24</sup>。

他方、「側面的普遍」の例としては、レヴィ＝ストロースの呪術論が取り上げられている（Merleau-Ponty, 1960, p.153／竹内監訳, 1969, p.196）<sup>25</sup>。レヴィ＝ストロースは、呪術師の治療行為を、精神分析に基いて理解する。だがそれだけではなく、精神分析の治療行為も、呪術師の治療から理解しようとしているのである<sup>26</sup>。

---

<sup>24</sup> メルロ＝ポンティは、レヴィ＝ストロースの神話論（Lévi-Strauss, 1958, pp.235-265／荒川ら訳, 1972, pp.228-256）についても同様の指摘を行っている（Merleau-Ponty, 1960, pp.151-152／竹内監訳, 1969, pp.194-195）。

<sup>25</sup> レヴィ＝ストロースの呪術論とは、「呪術師とその呪術（magie）」と「象徴的效果」である（Lévi-Strauss, 1958, pp.191-234／荒川ら訳, 1972, pp.183-227）。

<sup>26</sup> 「我々の精神身体医学的研究は、シャーマンがどのようにして病いを癒すか、たとえば、彼がどのようにして難産の人を助けるのかを理解させてくれる。だが、シャーマンもまた、精神分析が我々の魔術であることを我々に理解させてくれるのである。精神分析も、それがどれほど規則通りの丁寧な仕方になされようと、純粋に客観的方法（仮にそのようなものがあるとして）でありえない転移（transfert）の荘重な雰囲気のみならず、二人の生の交渉を通じてしか、一人の人間の生の真相に達しえないのである」（Merleau-Ponty, 1960, p.153／竹内監訳, 1969, p.196）。

民族学とは、「未開の」社会といった特殊な対象によって規定されるような専門学科ではない。それは、対象が「他 (autre)」である時に課せられてくる思考の一つの仕方であり、我々が自分自身を変えることを要請する思考の一つの仕方なのである (Merleau-Ponty, 1960, p.150／竹内監訳, 1969, p.193)。

メルロ＝ポンティは、自分自身を変え得るような「他者」の経験を述べているが、このことがなぜ「側面的な普遍」とみなされるのだろうか。「側面的」という形容詞に関しては、メルロ＝ポンティの言語論が参考になる<sup>27</sup>。関連する事態を手短かにみてよう。

### 3.3.2 言語学との関連

メルロ＝ポンティは1940年代末頃からスイスの言語学者ソシュールの理論をしばしば援用している<sup>28</sup>。「ある語が意味を持つ」という事態について、我々は、「その語がそれ自身、意味を持っている」と考える場合が多いであろう。しかし、ソシュールによれば、ある語がある意味を持っているのは、その語が、(その語と関連のある) 様々な語とすでに意味上で関わっていることに基いているのである。

たとえば、「男」という語であれば、「女」という語との対比だけでなく、「男の子」や「男性」という語等と意味上の関連 (差異) がある。「男」に関連している様々な語も、もちろん、それぞれ別の語と別の関連 (差異) を持っているので、結局、一つの語が意味を持つのは、その言語全体にお

---

<sup>27</sup> メルロ＝ポンティの言語論については、家高 (2013b) を参照。

<sup>28</sup> 代表的な論文は、1952年に発表された「間接的言語と沈黙の声」(Merleau-Ponty, 1960, pp.49-104／竹内監訳, 1969, pp.57-129) である。

ける意味上の様々な関連のおかげであり、その語自身に意味が内在しているのではない<sup>29</sup>。

このような語等の相互の関連をメルロ＝ポンティは「側面的」と呼ぶ。「記号のそれぞれを意味するもの (signifiant) とするのが、記号と記号の側面的関係 (rapport latéral) である」と考えるならば、語等の記号の間の関係が意味を作り出している以上、「意味が現れるのは、様々な語の交差において、いわばそれらの間 (intervalle) においてなのである」(Merleau-Ponty, 1960, p.53／竹内監訳, 1969, p.62)。つまり、様々な語の間から滲み出る「側面的な意味」という事態があるのだ (Merleau-Ponty, 1960, p.58／竹内監訳, 1969, p.70)。

この「側面的な意味」から「側面的普遍」と表現されている事柄を考えることができるだろう。メルロ＝ポンティによれば、民族学とは、他文化の事象（たとえば、シャーマンの治療行為）を知ることだけでなく、その事象によって、自文化の事象（精神分析の治療行為）を考え直すという営みである。このように他文化と自文化の「間」で思考することが、「側面的」と呼ばれていると考えられる。

そして、このような考察が「普遍」と名付けられているのは、他文化に接することで、自文化の自明な事柄が問い直されることに関わっているからであろう。すなわち、それまで自文化だけでなく、他文化の事象を考えるときの前提であったような事柄が根本的に問われ直すとき、その前提自身が依って立つような、或る種の「地盤」<sup>30</sup>のようなものが、時として垣間見られることがある。このような「地盤」をメルロ＝ポンティは「側面的普遍」と呼んだのであろう。

---

<sup>29</sup> 「ラング (langue : 体系的な言語) における名辞は、様々な名辞の間に現れる様々な差異によってのみ生み出される」(Merleau-Ponty, 1960, p.49／竹内監訳, 1969, p.58)。

この「側面的普遍」は、様々な文化から共通要素を抽出して作り上げられた「普遍」ではなく、また、様々な文化の事象を説明できるような「メタ構造」としての「普遍」でもない。だが、それは、自らの経験における前提的な事柄が基いている「地盤」に触れており、ここから他の文化の様々な事柄が考えられるようになる以上、「普遍」と名付けられたと考えられる<sup>31</sup>。

ところで、他者によって自分の経験が問われ、さらにその問いかけによって他者が自ら自身のことを考えることがグループインタビューにおいて生じていた。だからこそ、西村はグループインタビューにおいて「側面的普遍」が実現されていたと述べたのである（西村，2016，pp.212-213）。「側面的普遍」の実現を西村は、メルロ＝ポンティの表現を借りて「拡張された経験」<sup>32</sup>とも呼んでいる（西村，2016，p.213）。

---

<sup>30</sup> この「地盤」とは、「自分自身の文化のなかに取り込まれていないために、それによってかえって他の様々な文化とも疎通し合えるような、自らの野性の（sauvage）領域」とメルロ＝ポンティが呼んでいる事柄のことである（Merleau-Ponty, 1960, p.151／竹内監訳，1969，p.194）。

<sup>31</sup> 「側面的普遍」と似たメルロ＝ポンティの表現としては、「はすかいの普遍性（une universalité oblique）」が挙げられる（Merleau-Ponty, 1960, p.176／竹内監訳，1969，p.229）。これは、（1956年に刊行された）或る哲学選集の序文「どこにもあり、どこにもない」に見られる表現であり、該当の箇所では東洋哲学と西洋哲学の出遣いと相互の理解について述べられている。なお、「はすかいの」と訳したobliqueは、「斜めの」あるいは「間接的な」とも訳される語であって、メルロ＝ポンティは「側面的」と同義に使っている場合がある（Merleau-Ponty, 1960, p.58／竹内監訳，1969，p.70）。

<sup>32</sup> 「側面的普遍」において重要なのは、「他国や他の時代の人びともにも原理的に接近可能になるような、ある拡張された経験（une expérience élargie）を構成すること」である（Merleau-Ponty, 1960, p.150／竹内監訳，1969，p.193）。

### 3.3.3 ガダマーの思想との関連

「拡張された経験」あるいは「経験の拡張」は、実はガダマーの哲学的解釈学との接点が多い。それゆえに、グループインタビューにおける語り継ぎもガダマーの基本概念に基いて捉えることができるかもしれない。

その基本概念とは「地平 (Horizont)」である。ガダマーの哲学的解釈学の基本的なモデルは、(ギリシア哲学等の) 古典テキストの理解である。ガダマーによれば、(時代が離れた) 古典テキストを理解することによって読者は、(古典テキストに存している)「歴史的な地平」に加わることになる (Gadamer, 1990 [1960], pp.307-312／轡田ら訳, 2008, pp.473-480)。

この「地平」には、そのテキストに書かれている内容だけではなく、そのテキストが関連している以前の様々なテキストも含まれているので「歴史的」と呼ばれている。ある古典テキストは、それ以前のテキストが投げかけている「問い」に対する「応え」である。そして、そのテキストは、現在の読者に対して「問い」として存在し、そのテキストを理解し解釈するなかで、読者はそのテキストに「応える」 (Gadamer, 1990 [1960], pp.375-383／轡田ら訳, 2008, pp.571-582)。このように「応える」ことによって、読者自身に存していた「地平」が、ずれていく (Gadamer, 1990 [1960], p.489／轡田ら訳, 2012, p.828)。このような事態は、古典テキストの理解だけでなく、会話にもあてはまる。ガダマーは次のように述べている。

個人は常に既に他人と理解し合っているゆえに、本当には決して個人ではないのと同様、一つの文化を包み込んでいるという閉ざされた地平というものも一個の抽象にすぎない。一つの立場に絶対的に拘束されることはなく、それゆえに、決して本当に閉じた地平を持つことはないということが人間存在の歴史的な動性 (geschichtliche Bewegtheit) の本質をなしている。地平とは、われわれがそこへ歩み入るものであ

り、われわれとともに動いている。動く者にとって様々な地平は自らずれていく (sich verschieben) のである (Gadamer, 1990 [1960], p.309 / 轡田ら訳, 2008, p.476)。

ここで述べられている「個人」と「地平」の関係は、グループインタビューの「参加者」とその「共通の基盤」(西村, 2016, p.15) との関係に相当するであろう。

さらに、ガダマーは「個人は常に既に他人と理解し合っているゆえに、本当には決して個人ではない」と述べているが、それは、西村が「純粋な『個別』であること自体が、私たちの経験には見出され得ない」と主張することと重なっている (2016, p.212)。

以上のようにガダマーと西村の主張はかなり接点があるので、グループインタビューの語り継ぎの経験を、ガダマーの「地平」の概念から捉えることができるであろう。

つまり、語り継ぎによってグループインタビューの語りの「地平」は拡張していくのである。また、グループインタビューにおいて、ある語りを聴いたとき、自らについて根本的に考え直す事態があり、これを西村は「側面的普遍」とみなした。他方、このような事態は、ガダマーにおいては「根本的な否定の経験」であり、このような経験があるからこそ、新たな洞察が生じるのである (Gadamer, 1990 [1960], p.362 / 轡田ら訳, 2008, p.551)。このことも「地平のずれ」に関わっている事態である。

以上のように、グループインタビューの様々な出来事は、ガダマーの「地平」等の概念からも捉えられるであろう<sup>33</sup>。

もちろん、西村 (2016) とガダマーとの違いもある。ガダマーは古典テクストの理解をモデルとしたため、理解の普遍的な媒体として「言語」を考察の中心に据えた (Gadamer, 1990 [1960], pp.385-494 / 轡田ら訳, 2012,



pp.677-835)<sup>34</sup>。西村の場合、グループインタビューは確かに言語によってなされるが、その内容は看護実践であり、実践の理解において西村は身体性における共有（間身体性）を強調する（2016, p.186）。言語的な地平と感覚的身体的な地平との共通性と違いについては、我々の今後の課題としたい。

### おわりに

最後に本稿の議論をまとめ、続いて、質的ケース・スタディの学問性を指摘する。

村上（2016b）と西村（2016）の検討において、一つのみのケースの研究に関して、「個別」や「普遍」（あるいは「一般」または「本質」という概念枠を使うことが適切ではないということが明らかにされた。その理由は、伝統的な概念の使用法と異なるというだけでない。「個別」と「普遍」という概念枠は、この概念枠にふさわしい研究（一般化や本質化を求める研究）が適切に使用するのであって、他方、そうではない研究（質的ケース・スタディ等）は、別の仕方で自らの学問性を提示することで十分であると考えられる（家高、2016）<sup>35</sup>。

質的ケース・スタディの学問性については二つの特徴が挙げられる。

村上（2016b）が強調しているように、それぞれのケース（出来事）には独自性があり、このようなケースを調査研究することは、ケースの多様性を知ることになる。民族学固有の目標としてレヴィ＝ストロースは、ケ

---

<sup>33</sup> ガダマーの「地平」概念の利点は、（「側面的普遍」等の）「普遍」や「個別」という概念枠とは異なっていることだけでなく、（伝統的な意味での）「普遍」や「個別」の理解の前提となる歴史的で言語的な動性を示していることもある。

<sup>34</sup> 人間科学や社会科学における基礎的事態としての言語については、家高（2013a）を参照。

ースの違いを知り、そしてお互いに比較することによって、それぞれのケースを理解することであると述べている (Lévi-Strauss, 1958, p.384／荒川ら訳, 1972, p.361)。つまり、質的ケース・スタディ等の記述的研究が資するのは、様々なケースの「比較可能性 (comparability)」であって、その「一般化可能性 (generalizability)」ではないのである。比較を介して様々なケースの「地図」(Geertz, 2000, p.83／鏡味ら訳, 2007, p.108) が作り上げられ、また作り直されて広がっていく。質的ケース・スタディのこのような特徴は、「知の水平方向への拡張」と呼べるかもしれない<sup>35</sup>。

質的なケース・スタディの学問性の第二の特徴は、西村 (2016) が「側面的普遍」として指摘している事態に関わっている。他のケース (経験) を知ることは、時として、自分自身のあり方を問い直すことにつながる。これは、石井 (2009) の主張と重なっているだろう。石井によれば、文脈

---

<sup>35</sup> 質的研究独自の「一般化」として「適用可能性 (transferability)」(Lincoln & Guba, 1985, pp.297-298) や「自然な (naturalistic) 一般化」(Stake, 1995, pp.85-87) が挙げられるが、「適用可能性」や「自然な一般化」は (通常の意味での) 「一般化」とはまったく異なった事態である。つまり、「たった一つのケースであったとしても、それが詳細に記述されているのであれば、多くの人に理解可能であり、時として、大きな影響を与える」という事態が「適用可能性」等の内実である。これが「一般化」と呼ばれるのは、「たった一つのケースの記述は『完全に閉じて理解不可能な個別』ではない」ということに過ぎない。

<sup>36</sup> もちろん、様々なケースからその共通性や一般性を求めることはできるし、現にしばしばなされている。このような場合、ケース・スタディは、一般化を目指す研究のパイロット・スタディとみなされうる (Holloway & Wheeler, 2002, p.221／野口監訳, 2006, p.219; Holloway & Wheeler, 2010, p.251)。だが、このために、「ケース・スタディは、より大規模な研究のパイロット・スタディでしかない」と主張することはできないであろう。ただ一つのケースの研究であっても、他に替えがたいデータが詳細に示されているのであれば、そこには学的な意義があるというのが本稿の基本的な立場である。

や背景だけでなく、偶然の事実や他の可能性も含んだケース記述は、当事者の経験や体験が理解できるだけでなく、読者自身も自らや自らの状況等を再考する機会となる。詳細に記述されたケースを理解することによって、自ら自身とその「基盤」を考え直すことは、「知の垂直方向への拡張」と呼べるだろう。

以上の二つの特徴は、ケースの共通性や一般性を求める研究（一般化志向のアプローチ）においてはなされないことであろう。「水平方向」と「垂直方向」への「知の拡張」、ならびに各研究者独自のケース解明が、質的ケース・スタディの学問的重要性であると考えられる。

## 引用文献

- ・ Aristotle. (1933). *Metaphysics Books1-9* [translated by H. Tredennick]. Harvard University Press./出隆訳(1959). 形而上学 上. 岩波書店.
- ・ Benner, P. Tanner, Ch. & Chesla, C. (2009). *Expertise in Nursing Practice: Caring, Clinical Judgment, and Ethics* (2<sup>nd</sup> ed.). Springer Publishing Company./早野 Zito 真佐子訳 (2015). 看護実践における専門性―達人になるための思考と行動. 医学書院.
- ・ Benner, P., Kyriakidis, P.H. & Stannard, D. (2011). *Clinical Wisdom and Interventions in Acute and Critical Care: A Thinking-in-Action Approach* (2<sup>nd</sup> ed.). Springer Publishing Company./井上智子監訳 (2012). 看護ケアの臨床知―行動しつつ考えること, 第2版. 医学書院.
- ・ 尾藤誠司 (2013). 科学的根拠に基づく医療 (EBM) と倫理的臨床判断. 医療情報 [シリーズ生命倫理学編集委員会編]. 丸善出版. pp.140-159.
- ・ Byrne, D. & Ragin, Ch. C. (ed.). (2009). *The SAGE Handbook of Case-Based Methods*. Sage Publications.
- ・ Chan, G., Brykczynski, K., Malone, R. & Benner, P. (2010). *Interpretive Phenomenology in Health Care Research*. Sigma Theta Tau International.
- ・ Flick, U. (2007). *Designing Qualitative Research*. Sage Publications./鈴木聡志訳 (2016). 質的研究のデザイン. 新曜社.
- ・ Gadamer, H-G. (1990 [1960]). *Gesammelte Werke Bd.1: Wahrheit und Methode* (6. Auflage).

- J.C.B.Mohr.／轡田収, 卷田悦郎訳 (2008). 真理と方法Ⅱ. 法政大学出版局.
- ・ Gadamer, H-G. (1990 [1960]). *Gesammelte Werke Bd.1: Wahrheit und Methode* (6. Auflage). J.C.B.Mohr.／轡田収, 三浦國泰, 卷田悦郎訳 (2012). 真理と方法Ⅲ. 法政大学出版局.
- ・ Gadamer, H-G. (2010 [1993]). *Über die Verborgenheit der Gesundheit: Aufsätze und Vorträge*. : Suhrkamp.／三浦國泰訳 (2006). 健康の神秘—人間存在の根源現象としての解釈学的考察. 法政大学出版局.
- ・ Geertz, C. (2000 [1973]). *The Interpretation of Cultures*. Basic Books.／吉田慎吾, 柳川啓一, 中牧弘充, 板橋作美訳 (1987). 文化の解釈学Ⅰ. 岩波書店.
- ・ Geertz, C. (2000). *Available Light: Anthropological Reflections on Philosophical Topics*. Princeton University Press.／鏡味治也, 中林伸浩, 西本陽一訳 (2007). 現代社会を照らす光—人類学的な省察. 青木書店.
- ・ George, A. L. & Bennett, A. (2005). *Case Studies and Theory Development in the Social Sciences*. The Mit Press.／泉川泰博訳 (2013). 社会科学のケース・スタディー理論形成のための定性的手法. 勁草書房.
- ・ Giorgi, A. (2009). *The Descriptive Phenomenological Method in Psychology: A Modified Husserlian Approach*. Duquesne University Press.／吉田章宏訳 (2013). 心理学における現象学のアプローチ: 理論・歴史・方法・実践. 新曜社.
- ・ Glaser, B.G. & Strauss, A.L. (1967). *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. Aldine Transaction.／後藤隆, 大出春江, 水野節夫訳 (1996). データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか. 新曜社.
- ・ Holloway, I. & Wheeler, S. (2002). *Qualitative Research in Nursing* (2<sup>nd</sup> ed.). Blackwell Publishing.／野口美和子監訳 (2006). ナースのための質的研究—研究方法から論文作成まで, 第2版. 医学書院.
- ・ Holloway, I. & Wheeler, S. (2010). *Qualitative Research in Nursing and Healthcare* (3<sup>rd</sup> ed.). Wiley-Blackwell.
- ・ Holstein, J.A. & Gubrium, J.F. (1995). *The Active Interview*. Sage Publications.／山田富秋, 兼子一, 倉石一郎, 矢原隆行訳 (2004). アクティヴ・インタビュー—相互行為としての社会調査. せりか書房.
- ・ Husserl, E. (1976 [1913]). *Husserliana Band III, Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. Martinus Nijhoff.／渡辺二郎訳 (1979). イデーネーⅠ—Ⅰ—純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想第1巻 純粹現象学への全般的序論.

みすず書房。

- ・家高洋 (2013a). 質的研究の前提と主題は何か. 看護研究, 46(1), 90-103.
- ・家高洋 (2013b). 言語について. 看護研究, 46(2), 216-225.
- ・家高洋 (2013c). ガダマーについて―看護研究におけるその意義. 看護研究, 46(3), 336-346.
- ・家高洋 (2013d). 実践の知について―看護研究における基本的な枠組み. 看護研究, 46(5), 520-529.
- ・家高洋 (2013e). 看護研究におけるケースの知の意義 (前編). 看護研究, 46(6), 620-628.
- ・家高洋 (2013f). 看護研究におけるケースの知の意義 (後編). 看護研究, 46(7), 728-739.
- ・家高洋 (2014a). 研究にとっての〈現実〉(前編). 看護研究, 47(1), 62-73.
- ・家高洋 (2014b). 研究にとっての〈現実〉(後編). 看護研究, 47(2), 156-167.
- ・家高洋 (2016). 看護研究における実践に関する知識の基本的な枠組み. 看護研究, 49(3), 212-224.
- ・石井淳蔵 (2009). ビジネス・インサイター創造の知とは何か. 岩波書店.
- ・Kuhn, Th. S. (1996 [1970]). *The Structure of Scientific Revolutions* (3<sup>rd</sup>. ed.). The University of Chicago Press.／中山茂訳 (1971). 科学革命の構造. みすず書房.
- ・Lévi-Strauss, C. (1958). *Anthropologie structurale*. Plon.／荒川幾男, 生松敬三, 川田順三, 佐々木明, 田島節夫訳 (1972). 構造人類学. みすず書房.
- ・Lévi-Strauss, C. (1967 [1947]). *Les Structures élémentaires de la parenté* (2<sup>nd</sup> ed.). Mouton de Gruyter.／福井和美訳 (2000). 親族の基本構造. 青弓社.
- ・Lincoln, Y.S. & Guba, E.G. (1985). *Naturalistic Inquiry*. Sage Publications.
- ・Lloyd, G.E.R. (1968). *Aristotle: The Growth & Structure of his Thought*. Cambridge University Press.／川田殖訳 (1973). アリストテレス―その思想の成長と構造. みすず書房.
- ・松葉祥一 (2013). 現象学者は普遍的真理の夢を見るか―メルロ＝ポンティの「事実に普遍性」. 現代思想, 41(11), 137-151.
- ・Merleau-Ponty, M. (1945). *Phénoménologie de la perception*. Gallimard.／竹内芳郎, 木田元, 宮本忠雄訳 (1974). 知覚の現象学2. みすず書房.
- ・Merleau-Ponty, M. (1960). *Signes*. Gallimard.／竹内芳郎監訳 (1969). シーニュ1. みす

ず書房.

- ・ Morse, J. M. (2016 [2012]). *Qualitative Health Research: Creating a New Discipline*. Routledge.
- ・ 村上靖彦 (2013). 摘便とお花見－看護の語りの現象学. 医学書院.
- ・ 村上靖彦 (2016a). 仙人と妄想デートする－看護の現象学と自由の哲学. 人文書院.
- ・ 村上靖彦 (2016b). インタビュー分析の言語学的基盤, 個別者の学としての現象学. 看護研究, 49(4), 316-323.
- ・ 中畑正志 (2008). アリストテレス. 哲学の歴史 1－哲学誕生：古代 I [内山勝利編]. 中央公論新社. pp. 517-639.
- ・ 西村ユミ (2016). 看護実践の語り－言葉にならない営みを言葉にする. 新曜社.
- ・ 斎藤清二 (2013). 事例研究というパラダイム－臨床心理学と医学をむすぶ. 岩崎学術出版社.
- ・ Sandelowski, M. (1996). One is the Liveliest Number: The Case Orientation of Qualitative Research. *Research in Nursing & Health*, 19, 525-529.／谷津裕子, 江藤裕之訳 (2013). 「1」は最も生き生きとした数－質的研究のケース志向性. 質的研究をめぐる10のキーワードエッセイ：サンデロウスキー論文に学ぶ. 医学書院. pp. 64-72.
- ・ Schwandt, Th. A. (2007). *The SAGE Dictionary of Qualitative Inquiry* (3<sup>rd</sup> ed.). Sage Publications.／伊藤勇, 徳川直人, 内田健監訳 (2009). 質的研究用語事典. 北大路書房.
- ・ Stake, R. E. (1995). *The Art of Case Study Research*. Sage Publications.
- ・ 渡辺公三 (2011). レヴィ＝ストロースからさかのぼる－自然・都市・協同組合. マルセル・モースの世界 [モース研究会編]. 講談社. pp. 69-88.
- ・ Windelband, W. (2011 [1907]). “Geschichte und Naturwissenschaft.” *Präludien: Aufsätze und Reden zur Einleitung in die Philosophie*. University of Toronto Libraries. pp. 355-379.／篠田英雄訳 (1936). 歴史と自然科学 道徳の原理に就て 聖一『プレンダーディエン』より. 岩波書店. pp. 9-36.
- ・ 谷津裕子, 北素子 (2012). 質的研究の結果は一般化できないのか?－質的研究における一般化可能性. 看護研究, 45(4), 414-420.